様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５２４５０５８

研究課題名（和文）矢内原忠雄学生問題研究所未発掘資料から見る１９５０年代の学生運動と若者意識の分析

研究課題名（英文）Analysis of Student Movement and Awareness of the Youth in the 1950s from the Newly Discovered Documents at Tadao Yanaihara Research Institute of Student Issues

研究代表者
吉見　俊哉（Yoshimi, Shunya）

東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授

研究者番号：４０２０１０４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　21,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は未発掘であった「矢内原忠雄学生問題研究所資料」の整理から始まり、そこから同研究所の活動や晩年の矢内原忠雄の最大の関心事であった1950年代の若者意識の変化や学生運動の様相を多角的に分析した。それにより、同時代の学生たちの雑誌サークル活動や同研究所の米国アジア財団との繋がり、大学の自治のあり方などの重層的な厚みを戦後日本社会のなかに見出した。また、これらの資料群の本格的な目録作成、デジタル・データベース化を行うことで、本資料の詳細な内容と学術的価値を示した。さらに、その資料のパブリック・ドメインによる一般公開を行うことで、後続の研究が自由に資料を活用でき、日本の学術への発展に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義はこれまで知られていなかった「矢内原忠雄学生問題研究所」の活動内容を詳細に明らかにし、その膨大な資料をデジタル・アーカイブ化して公開することによって、戦後日本社会の若者意識や学生運動、知識人と学生の関係史、矢内原忠雄の影響圏など、本資料の文政を通して可能になる多くの研究に新たな地平を開くことができた。また1960年の日米安保闘争という戦後日本最大の転換点で若者たちが何を考え、どのように行動していたかを膨大な資料群と各領域の専門家によってその重層性が明らかにされた。本研究は未発掘資料に光を当てただけでなく、1950－60年代の新たな学生像を描き出した点で、戦後日本社会研究に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This research started from the arrangement of newly discovered documents at Tadao Yanaihara Research Institute of Student Issues and analyzed the changes in the awareness of the youth and student movement from multiple perspectives. Through an examination of the documents, it found out the the connection with the activities of the students' magazine circle and The American Asia Foundation of the same research institute and re-situated the multi-layerness of the autonomy of the University in the postwar Japanese society. In addition, the cataloguing and digitilization of the documents of this project clearly presented their detailed contents and academic value. Through a placing to the public domain, these documents are open them to the public and for free use for future research. This research thus contributed to the scholarship in Japan.

研究分野：社会学

キーワード：矢内原忠雄　学生運動　若者意識　安保闘争

１．研究開始当初の背景

東京大学は、全学から集められた資料の保管期間として大学史史料室を設置したが、創立百周年事業の一環であった『東京大学百年史』の編纂と刊行が 1987 年に完了して以降、集められた資料の保存と活用のために必要な整理が必ずしも十分には行われず、膨大かつ貴重な資料群が放置された状態に近かった。2010 年に大学史史料室長に着任した本研究の代表者である吉見俊哉は、史料室の片隅に矢内原忠雄学生問題研究所の資料群を発見した。これは戦後の高等教育史や学生運動史、若者意識研究に多大のインパクトをもたらすものだと確信した。

２．研究の目的

本研究は、東京大学史史料室に残された極めて貴重な未発掘資料群である「矢内原忠雄学生問題研究所資料」（運営委員会・懇談会記録: 約 27 冊、安保闘争・原水禁運動記録: 約 50 冊、大学新聞スクラップ: 約 80 冊、学生意識調査原票等: ロッカー2 箱など）について、その全容を解明し、この資料の分析から 1950 から 1960 年代の学生意識の構造と変化を立体的に把握し、さらにこの学生問題研究所に多大のエネルギーを傾けた晩年の矢内原忠雄の姿勢から、同時代の政治化した若者と知識人の関係を捉えなすことを目的とする。

本研究が本格的な取り組みをする「矢内原学生問題研究所資料」は、矢内原が晩年を捧げた学生問題研究所の活動の全容を示す類まれに重要な資料だが、これまでの研究の基礎となる整理や目録作成、資料内容の基礎的分析がまったくなされてこなかった。

本研究では、そうした基礎的な作業を進めることで、のちの研究に道を開きつつ、社会学、社会調査、思想史、社会運動史などの専門家によって資料の深い解読を進め、戦後日本社会研究に貴重な貢献をする。

３．研究の方法

（１）「矢内原忠雄学生問題研究所資料」の詳細な内容掌握、デジタル化とデータベース化

本研究が取り組む「矢内原学生問題研究所資料」は未発掘の段階にあり、分析の基礎となる整理作業もほとんどなされていない。したがって、作業は詳細な目録作成から始める必要があり、さらに主な資料についてデジタル画像を撮影して研究分担者、協力者の間で情報を共有し、分析の基礎となるメタデータ情報を作成する必要がある。本研究では、大型ロッカー５箱分の全資料をまず一つ一つ確認し、目録作成、デジタル画像撮影と並行して資料の性格についての基礎的分析をすすめる。

（２）学生運動の言説分析および日米安保前後の若者意識の構造と変化の分析

「矢内原忠雄学生問題研究所資料」の中核をなすのは、原水禁運動や日米安保闘争に係わった学生運動に関する資料や同時代の学生の社会意識の調査分析である。学生問題研究所が活発な調査研究活動をした 1950 年代から 60 年代にかけては、日米安保という戦後日本史の決定的な転換点を含んでおり、この時期に若者の意識と行動がどう変化していったのかを明らかにすることには大きな社会学的意義がある。本研究は学生運動における膨大なビラ、大学新聞の論説、学生たちの意識調査における発話や記述という３つの次元のデータを結び合わせることで、当時の若者たちの意識構造や行動パターンを立体的に明らかにする。

（３）矢内原忠雄の晩年の思想における学生問題の決定的重要性の解明

矢内原忠雄に関しては、これまで彼の思想と無教会派キリスト教の関係や台湾などの植民地政策、沖縄との関係について多くの分析がなされてきた。しかし 1950 年代半ば以降、藤堂総長在任中および退任後の矢内原にとっては、学生運動との対面こそ最大の思想的テーマであったのであり、このような知識人と政治化した若者との関係は、約 10 年度の大学紛争に先駆けるものである。本研究では、晩年の矢内原の思想を、これまでほとんど論じられることのなかった学生運動との関係において位置づけ直し、1960 年代を通じ、戦後日本社会全体を巻き込んでいく知識人と政治化した若者の関係を考える新しい視座を提供する。

４．研究成果

（１）「矢内原学生問題研究所資料」のデジタル・アーカイブ化事業について

ロッカー５箱分ほどある「矢内原学生問題研究所資料」の整理では、1. 資料の開封・ナンバリング、2. 目録情報の取得（ISAD(G)の形式を採用）、3. 主要資料のデジタル撮影を行った。

学生問題研究所は所長・東京大学元総長矢内原忠雄、副所長・海後宗臣が主体となり、1958 年から 1962 年まで設置された。これはアジア財団による助成金で成り立っていた。学生問題研究所は運営委員会とは別に、研究部と相談所が併設された。研究部は全部で３班あり、第１班は入学試験制度の学業生活におよぼす影響に関する研究、第２班は大学生の不安についての基礎的研究、第３班は現代学生の生活意識の研究をそれぞれ担当した。途中、資料室が設置され、図書・新聞・大学新聞などの収集、懇談会の開催を行った。相談所では、希望学生との面談、性格・職業適性検査、メンタルヘルスなどを扱い、民主教育協会 IDE との事業企画の重複を避

けている。
　第１班は、調査票・質問紙を協力校に配布、集計・分析をおこない、「高校の進路指導と大学生活」「就職に際しての大学生の考え方について」「大学入学前後に要する教育費」などの研究成果を発表している。第２班も同様の研究手法によって、「大学生の不安についての基礎的研究」「性格についての不安・大学生の自己理解」などを報告した。第３班は個別面談や座談会、行動観察などを併用することによって、「大学生の課外活動」「戦後学生運動史の年表作成」「安保問題における学生の行動とその意義」などを明らかにした。
　上述した資料群は、これまで矢内原忠雄および学生問題研究所のあり方を明らかにする上で欠かせない資料であったが、本研究のデジタル・アーカイブ化によって新たな整理・利用が可能となった。この資料は「東京大学文書館デジタル・アーカイブ」のホームページで全てではないが検索可能となっている。目録データはクリエイティブ・コモンズ CC0、画像データはクリエイティブ・コモンズ PD によって、パブリック・ドメインで公開されている。

（２）矢内原学生問題研究所の成り立ち・活動と日米の協働とずれについて
　以上の資料面での基礎作業の進捗を踏まえ、資料調査で明らかになったことを学術的に深掘りする研究を進めた。まず検討したのは、「矢内原学生問題研究所」がそもそもどのような経緯で設立された組織であり、活動の主眼はどこにあったのかを解明することであった。とりわけ同研究所の設立・支援に深く関わったアメリカの CIA の影響下にあるアジア財団との関係、そして矢内原や西村秀夫ら日本のキリスト教系知識人が研究所の活動のなかで果たしていた役割が考察されていった。その結果、同研究所の設立には、我々が当初考えていた以上にアメリカ側、すなわち冷戦期の CIA とアジア財団の戦略的意向が働いていたことが明らかになっていった。また、同研究所が 1960 年前後に集めた「安保問題」関連の学生資料（ビラ、パンフレット等）等の調査データについてもより深い検討を進めた。これらの検討のなかで、同研究所は、学生の進路やメンタルヘルスに関する相談も多く扱っており、そのような面で悩む学生が 1950 年代においても今日と同様、少なからずいたことも浮かび上がっていった。
　さらに、本研究を通じ、いくつかの比較分析の必要性も浮上してきた。前述のように、ロッカーに残されていた矢内原学生問題研究所関連の資料は膨大だが、それでも全体の中のある部分であり、残された資料が全体のどのような部分なのかを検討する必要があった。また、アジア財団は矢内原学生問題研究所と民主教育協会（IDE）の２団体を支援したが、前者への支援は数年で終了したのに対し、後者への支援は長期にわたった。この差がどのようにして生じたのかも検討された点であった。さらに、同研究所の設立は冷戦体制下での米国の対アジア戦略と深く結びついていたが、研究所で実施されていた調査はむしろ学生たちの身の上相談的なものが大きく、両者にはずれがあった。このずれについても検討を深めていく必要があった。さらに、調査全体を通じて矢内原以上に現場で重要な役割を果たした人物として、東大駒場キャンパスで学生担当の教員をしていた西村秀夫の重要性が浮かび上がってきたが、この西村についての検討もさらに進めるべきことが明らかとなった。

（３）1950～60 年代の大学生像とシンポジウムでの成果公表について
　以上を通じ、本研究の学問的焦点が、1950 年代から 60 年代にかけての大学生像にあることが明らかとなっていった。たとえば、戦前の学生運動を見てきた矢内原が、戦後の学生たちやその活動をどのように見たのかについての議論がなされた。研究所に集められていた雑誌から浮かび上がる学生像と同時代のサークル誌などから見えてくる学生像の関係など、論点が多く抽出されていった。また、1950 年代の学生運動において東京大学が占めていた位置の大きさが、やがてそうした位置を東大が失っていく過程とも結びつけて理解されるべきことも論点として浮かび上がった。さらに、本研究が焦点に据えた 1950 年代の学生像を、大学紛争が激化した 1960 年代末の学生像と比較する必要性もはっきり自覚されていった。
　結論として、本研究で考察された諸論点は、研究分担者や協力者となってきた各専門研究者によって以下のように分析が深められていった。すなわち、①戦後日本の思想空間のなかの矢内原忠雄（戦中・戦後期の思想空間の中での矢内原忠雄の位置）、②矢内原忠雄における大学生の戦後（矢内原とキリスト教との関係を、特に 1950 年代の矢内原における大学生という観点から捉え返す）、③日本共産党と学生運動の 1950 年代（矢内原学生問題研究所資料も参考に、1950 年代の大学生像を日本共産党との関係で問い返す）、④1950 年代の雑誌・サークル文化と学生運動（1950 年代の学生たちのメディア実践、文化実践に焦点を据え、学生問題研究所に集められた雑誌を分析）、⑤「学徒」と「学生」の間（戦中期の「戦争」に向けた学徒動員と戦後期の「革命」に向けた学生運動の間の連続性と非連続性）、⑥学生運動の戦前と戦後（東京帝大新人会と戦後の東京大学での学生運動の比較分析）等々である。さらに、すでに述べた①学生問題研究所における社会調査の位置づけ、②学生問題研究所と戦後の世論研究、③学生問題研究所とアジア財団についても、一層の分析の深化を目指した。これらの成果は、2019 年 3 月 11 日（月）に開催されたシンポジウム「学生たちの戦後：矢内原忠雄と東大学生問題研究所から見た 1960 年安保前後の大学生像」において発表され、大きな手ごたえを得ることができた。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計４件）
小玉重夫、日本における政治教育・市民教育の現状と課題、政治思想研究、査読無、15 巻、2015、81-96
小玉重夫・荻原克男・村上祐介、教育はなぜ脱政治化してきたかー戦後史における 1950 年代の再検討ー、年報政治学 2016、査読有、1 巻、2016、31-52
野上元、歴史が聞こえてくることー方法的ラディカリズムと歴史への愛、日本オーラル・ヒストリー研究、13 巻、2017、7-18
米谷匡史、三・一独立運動、五・四運動と帝国日本のデモクラシー、歴史地理教育、891 巻、2019、28-33

〔学会発表〕（計３件）
米谷匡史、無名・集団の文学―工作社・谷川雁とサークル文化運動、日本近代文学会、2015 年 6 月 27 日
吉見俊哉、Reframing the Concept of “Culture” in Postwar Japan、Association for Asian Studies Annual Conference（国際学会）、2017 年 3 月 18 日
野上元、歴史が聞こえてくることー方法的ラディカリズムと歴史への愛、保苅記念シンポジウム――いまあらためて「保苅実の世界」を探る（日本オーラル・ヒストリー学会 第 14 回大会）、2016 年 09 月 03 日

〔図書〕（計５件）
野上元・小林多寿子編、ミネルヴァ書房、歴史と向きあう社会学：資料・表象・経験、2015、384
栗原彬・吉見俊哉編、岩波書店、敗戦と占領――1940 年代（ひとびとの精神史 第 1 巻）、2015、288
栗原彬編、吉見俊哉他、岩波書店、六〇年安保――1960 年前後（ひとびとの精神史 第 3 巻）、2015、288
宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編、影書房、「サークルの時代」を読む―戦後文化運動研究への招待、2016、368
丹羽 美之、吉見 俊哉、東京大学出版会、戦後史の切断面、2018、320

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
東京大学文書館デジタル・アーカイブ　https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：小玉　重夫
ローマ字氏名：Kodama Shigeo
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院教育学研究科（教育学部）
職名：教授
研究者番号（8 桁）：40296760

研究分担者氏名：佐藤　健二
ローマ字氏名：Sato Kenji
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院人文社会系研究科（文学部）
職名：教授
研究者番号（8 桁）：50162425

研究分担者氏名：野上　元
ローマ字氏名：Nogami Gen
所属研究機関名：筑波大学
部局名：人文社会系
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：50350187

研究分担者氏名：米谷　匡史
ローマ字氏名：Yonetani Masafumi
所属研究機関名：東京外国語大学
部局名：大学院総合国際学研究院
職名：教授
研究者番号（8 桁）：80251312

研究分担者氏名：鳥羽　耕史
ローマ字氏名：Toba Koji
所属研究機関名：早稲田大学
部局名：文学学術院
職名：教授
研究者番号（8 桁）：90346586

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。